

ある。ようやく乗船してはたはたとひるがえる日の丸の旗をみておのずと涙が流れた。八月二十七日、広島県の大竹港に上陸し奥村家族七人は乞食姿で故郷に着き、家族全員無事に引揚げてこれたと両親は喜んでくれた。

奥村氏はかつて国鉄職員時代の成績抜群だったこともあり直ちに復帰でき、そのまじめさと実力で副参事に栄進し重くもちいられた。

定年後老齢なのに東海ギフト連盟事務局長に就任している。子供らは岐阜大、早大を卒業それぞれ家庭をもち、二人の娘は嫁ぎ先で幸せ。

今日の幸せは妻の協力のおかげであると老妻をいたわりながら八十三歳でなお健康に恵まれている。一句「風雪流れて四十有余年、ここに幸あり」と結んでくれた。

(世引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

## 幼き日の思い出

愛知県 坂部 秘 一

海外へ

今もう空のかなたに、父孫市、母きり、兄兆貞、弟日志ひこしの四人と共に父の勤務先である東洋紡績が、当時の満州国安東市に工場建設を計画したため、建築関係の仕事に従事していた父と共に、家族五人海外へ移住した。私、現在五十七歳、福井県敦賀の東洋紡績株式会社の社宅で生まれたと聞いてはいるが、実際にその地は全く覚えていない。引揚げ後母の実家にあった写真より雪の上でスキー板を持って撮った四歳ぐらいの写真を見て知っているのみである。父の兄弟三人、母の兄弟五人ではとんだが、三河地方に住んでいたように聞いていた。

家族五人異国の地に赴くことになってその兄弟たちは、皆寂しさを押さえて、送り出してくれたとのこと

であった。これも会社勤務者の勤めと胸に秘め、両親は三河の地を離れたそうだ。父二十九歳、母二十五歳、兄六歳、私四歳、第一歳のころであった。兄弟三人は何も分かっていなかったようだ。海の向こうに渡るとはどういうことなのか、又満州なんてどんな所なのか全く家族皆聞いたことのない所であった。只両親の言われる通りに三人兄弟ははしゃぐ程度であったかも知れない。三十歳前の両親と私の年を重ね合わせて考えてみると、学校を卒業して会社へも入社し、仕事の方にも慣れて充実した勤務をしている年令であったと思う。

会社を出れば友と街へ出て仕事の疲れをいやす一時を過ごす、大変油の乗り切ったころであったと思う。そのことを考えるといかに業務命令と言えど、異国の地に赴く両親の考えは大変な気構えがあったに相違ないと思う。今はもう空のかなたにある両親に本当の気持ちや苦悩を聞くすべもない。前述のようにサラリーマンの宿命なのであろうか、兄六歳にして疲満し、私四歳、第一歳の年令で学校に行く年令でもなく、当時

の教育と居住地では幼稚園もなかったころであり、日々遊び過ぎたと思いきされる。

#### 思い出多い波乱の満州生活

社宅の前には「カプト山」あり、後方には「エス池」と呼んでいたSの字型の池があり、その裏遠くには朝鮮半島と中国大陸の付け根を分断するように「ヤール川」。我々は「鴨緑江ハムギョウ」と呼んでいたが、その鴨緑江と社宅の間には工場があり、工場と社宅の間には子供のころの膝頭ぐらゐの水位であったと思う川があった。(川の名前は今思い出せないが)。

子供のころの生活は春は「カプト山」であった。山に登っての花や植物を採り、時には水晶をも取った思い出もあり、竹や木の枝を持ってのちゃんばらごっこをして岩の間や木々の間を走り回ったり、滑り落ちたりして一日中遊び回ったことを今更のように思い出す。あの「カプト山」遊びに夢中になり家に帰れず岩の陰でキツネの声におびえながら体を寄せ合って夜を明かしたことを今でも鮮明に思い出す。

あの山「カプト山」での遊びに飽きれば会社手前の

小川での遊びである。きれいに澄んだ水であった。網とバケツを持つての魚とり、フナ、小ガニ、糸ウナギなどをとって服を水びたしにして一日中遊び回った思ひ出がある。そのころには水着もなく裸のまま水およぎ、砂遊び、かけっこ、相撲にと道具類のない遊びであった。

それでも当時の子供たちは、楽しく太陽の落ちるまで遊び続けたことが筆を持っている今、鮮明に脳裏に浮かんで来る。満州の冬が大変冷たい。社宅の中央にテニスコートがありその横に銭湯があった。遊び疲れて早目の銭湯、まだ子供しかいない浴槽での水遊び、風呂焚きの満人のおじさんに叱られて脱衣箱の中に隠れたことが思ひ出される。その銭湯から一步外に出ると手に持った手拭が凍ってすぐ棒になる。すると子供同志がちやんばらごっこをして走り回った。

雪の少ない割に大変温度の低い所であった。そのためスキーなどはしたことは全くない。水をまけばまたたく間に凍ってしまう。池も水道の水も、川も水滴も全ての水が凍ってしまう。それが又子供にとっては実

に楽しい時期でもあった。と同時に実に楽しい場所を作ってくれた。社宅にあった防火用水も道も、又社宅専用のスケート場（社宅から少々はなれた場所にあつたと思う。）も全く氷上の遊び場所になつてしまった。年上のお兄さん、お姉さんたちはスケートに、又子供たちは氷上でのコマ遊びに、そしてスケート靴を持たない子供たちは下駄の歯を取り去つて、その下にスケートの刃（エッジ）のような鉄の刃を釘で打ち付けて、その上に腰掛けて交互に引つ張り、押し合う橇遊びなどをして一日中転げまわつた。

また、ドングリの大きい形をしたコマでとんがった方を下にして氷の上で、棒の先に紐を結んでその紐で叩きながら回して遊ぶコマ回し、種々の氷上遊びがあり、冷たい冬期も結構楽しい思ひ出の多い日々であった。氷上での鬼ごっこも又楽しく痛い思ひ出のある遊びであった。滑って転んでコブを作つたり、体中痛めでの遊びもあつたりで結構現在の子供たちの味わえぬ冬の遊びであつた。

家へ帰ればれんが造りで二重窓の部屋、この部屋の

真ん中にはどこの部屋でも触れられる「ベチカ」と呼ばれる暖炉があった。外はれんが造りで鉄板を包んであったように思う。そこに体を寄せて遊び疲れからよく寝込んでしまった覚えがある。外は寒冷、部屋の中にはほかに「オンドル」と呼ばれた暖かい床がありねそべって遊んだこともある。季節季節の遊び方も今考えると東北、北海道地方と同じ雰囲気があると思われる。

#### 小学校へ入学す

時は過ぎ小学校に入り、毎日の通学の楽しさも忘れ得ぬことである。今と同じようにランドセルを背にしたの通学。道々にはコンクリートもアスファルトの舗装もなく、両側には草花の生えた緑の多い曲がりくねった長い長い通学路であった。社宅から日本人のみの小学校への毎日の通学。行きは分団での登校であり、帰りは級ごとの勝手な帰りであった。かけっこに鬼ごっこにまた、道に寝転んだり草花を摘んだりの一時間ほどの楽しい日々の連続であった。雨降りとは冬は本当に困った。学校へ行くのも嫌であった。広い校庭に

は今と違って遊ぶ器具も少なく、鉄棒と梯子を横たくさん並べ、その上に早く登るというロクボクと呼ばれた器具しか無かったように思う。

校庭の片隅には畑もあり、色々の野菜や果実を植えて食べることを楽しんだものであった。秋には収穫した野菜類が給食の中にたくさん入っていた。この喜びは給食の時間の楽しさであり、時には豚肉が入った汁が出るとその肉のみ最後まで残して置き、口に含んでどこかに捨てた覚えがある。先生に見つかってよく怒られた思い出もある。その楽しく又うれしさを味わった校庭の片隅には「防空壕」といわれる思い出してもいまいましい空間があった。この空間には数回逃げ込んだ覚えがある。子供心に（小学校二、三年生にしては）、授業中に勉強を中断しての行動は、多少の楽しさもあったように思う。壕の中で何を話合っていたのか全く思い出せないが、体を寄せ合ってひそひそ話でも子供たちには楽しいものであった。実際に爆撃があったような思い出はない。貧弱なあの壕に空から「お土産」でもあればひとたまりもなかったらう、息

つく暇もないであろう。社宅の中にも数か所にあったように思うし、「カブト山」の数か所にも造ってあったと思う。

学校での授業は今の小学校と変わらないが、教室へ入る前の校庭での授業は校長先生の挨拶の後は決まっていた。「教育勸語」の斉唱であった。「朕おもうに、我が皇祖<sup>こうそ</sup>皇宗<sup>こうそう</sup>……」で始まった教えを全員大きく張り上げて朗唱であった。漢字ばかりの文は低学年生には全く読めなかった。日々両親に読んで教えてもらったように思う。体育の時間には棒の先端に布を巻き、又竹の先端をとがらしての竹槍を作って、敵に見たてた藁人形を突き刺す銃剣術の訓練であった。教師の掛け声と生徒達の掛け声が一つになっての猛特訓であった。一時間体と声の特訓は、全く死に物ぐるいであった。一つ、二つ、三つ、小さな体で、男の子も女の子もかわいい声を張り上げての訓練。真剣そのものであった。力を又、声を少しでも緩めれば指導員にどなられる。時には殴られるの連続であった。これも国のため自分のためと一生懸命であった。

教室では二人用の腰掛けと机であった。授業内容は全く覚えていないが、授業後の清掃は横一列に並んでの雑巾掛け、横の子に負けないようにと懸命に腰を曲げてのいわゆる競走であった。一番になり得意気な顔をしたものだ。通学時や社宅の外では現地人（満人）との触れ合いはあったが、言葉も通じずみぶり手ぶりで交流であった。今は多少の中国語（満語）を覚えている。学用品をあげて、食べ物をもろう。このようなこともよく行った。マントウ、クワズル、コーリヤンダンゴ、砂糖キビなどよく食べた。これらは下校時の喜びや楽しみの一つであった。

#### 終戦直前と終戦

ある日静かだった社宅内に警報が響いた。平穏な日々の社宅に「ソ連兵が入って来るぞ」との一報である。ソ連兵は子供たちには何もしなかったが、何のこともわからなかった。それは母親やお姉さんたちを連行して行くので「隠れる」との警報であった。母も男のかっこうをして家の中に身を隠してソ連兵から逃れていた。そのことが続くに従って頭を坊主にしたたり、

口髭を生やしているように口元に墨で書いたりしていたが、やがては家の中に銃を持った兵隊が入って来るようになり、女の人は風呂桶の中に身を隠したことも覚えていた。「ソ連兵が帰ったぞ」との警報で一息ついた日々だった。それが無い日は屋根下の雀のひなを捕って、手乗りにしたり、かくれんぼう、鬼ごっこなどをし、のどかな日々であった。

僕たち五人も幸せな日々であった。それもソ連兵が去り蒋介石軍が進攻して来たが、ソ連兵のようなことはなく静かな日々が続いた。父はソ連兵のいる間に一週間ほど連行されたことだった。背に銃を突きつけられて殺されると思ったそうだ。恐怖の日々を一週間ほど経てひょっこりと帰って来た。子供たちはもちろん母もびっくりして大声で「お父ちゃん」と叫ぶので、その夕方はみちがえるほどの夕食のひとときであった。蒋介石の国府軍はどれほど滞在していたか、ある日突然工場から爆発音がして火の手が上がった。中共軍（八路）が進攻して来るので工場を使用不可能にするためだったとのこと。

その後工場整理に行った帰りに食べ物、飲み物をよく持って父は帰って来た。それは子供たちの楽しみみのひとときであった。特に「エッセンス」と呼ばれた水で薄めて口にする飲み物の味、今だに鮮明に思い出す味だ。後で蒋介石の進攻軍の頭は女性であり、その女大將は「社宅も一緒に爆破して逃げよう」との話であったと聞いて、「何という女だ」と母たちが皆が口にしていたように思い出される。

その後蒋介石の「国府軍」が撤退すると次は中共軍の「八路」の進攻であった。八路は何することも無く平凡な日々が社宅内に続き、父の土産を日々待ち続けた。その日々の前に住居は二階建ての一階に移り変わった。そのため工場の異様な光景が間近に映ったのである。（蒋介石軍にやられなかったお陰で今の自分があるのだ）。

しかし、こうなると私たち小学生の通学が以前とは大きく異なってきた。日々恐怖の連続だった。始めは集団登下校でよかったが、そのうちにその集団の中に満人の子供たちが襲って来るようになった。なぜだか

分からない。棒を持って追いかけれ、石を投げつけられたりした。それではと小学生ながらに考えた。「そうだ。今日は鉛筆でもやって見よう」「今日はノートでも」と許しを乞う子供の考えであった。この方法もながくは続かなかった。

社宅では登下校用の専用バスを出してくれた。子供心に楽しいひとときでもあった。バスでの話し合い、襲われる心配もなしであったが……。しかしその日々もそうは続かなかった。バスへのいたずら、棒で叩く、石を投げつける日々が多くなり、とうとう社宅での学習生活が始まった。今まで日本人と共に行っていた満人の大人、子供も戦いの終わりが近づいたのを知ったのか日に日に乱暴になって来た。何不自由なく過ごした民間人、それ以上だった警察官、特に警察官はみじめだった。「殴る、ける」のされ放題であった。テニスコートでの一日、次は社宅内での光景、しかし日本人には何の手出しも出来ないようすだった。只遠くから眺めているのみであった。今までの勇ましいかっこうのみじんもなかった。哀れな姿であった。

両親も又さいわいにも工場長も三河の出身者であったことがよかったのか、ある日、家に馬に乗り、軍刀を腰にしたかっこうのよい見習士官と言われる軍人が訪れた。「工場長にも話してある。この家で匿ってくれ」と言われた。その見習士官も三河の出身者だった。両親も心よく承知したようすだった。その後幾度となく馬に乗った姿が訪れた。馬にも乗せてもらった。初めて触れた馬、そして乗馬、何と高く見晴らしのよい所かと思つた。でも恐ろしかった。でもその日々を待ちわびた。軍刀も腰にさせてもらった。かっこうよく帽子も頭にして少々の意気にも感じた。又その都の土産物が待遠しかった。日ごろ口にしたことのない飲み物、菓子、果実など、近所の子供には自分として誇らし気だった。大いに自慢気だった。でも両親にしてみれば不安の日々だったのだ。「いつこの見習士官が襲われるかと」。

#### 終わった戦争

恐怖と不安の日々が続き、社宅内も活気のない毎日だった。子供たちは知らなかったが「天皇陛下のお言

葉」を聞いた大人たちは悲しさとむなしさの日々が続いた。子供心に察した。父は今までのような仕事もない。母も元気がない。私たちは社宅での学習で社宅の外にも出られない。半年、一年、一年半と過ぎるころから両親は知っていたのだらう。「この地を去る。日本に逃げ帰るのだ」と。

母は夜を徹しての袋作り、子供三人の手提げ袋やリュックサックがあった。もちろん両親用の大き目の物もあった。どの布で作ったのだらうか。布団の生地、外套の腕を取って作った袋物。父は建築家でお手もの荷車を作っていた。

両親の仕事を見ていて使い道がわかった。その袋や荷車にはぎっしりと家財道具が積み込まれた。子供たち三人も学用品や玩具類をギュウギュウにつめ込んだ。手に持ち、背負って見せた。とても歩ける重みではない。でもこの地を去るのだと聞くと、それぞれの荷物を袋類より出す訳には行かない。必死で持って見たが…。

ある日社宅を全員そろって去る日が来た。終戦の声

を聞いてから二年三か月目の昭和二十二年十一月であった。

#### 苦難の道のり

母と三人の兄弟は、前日持って見た各々の貴重品を、また父は背中と、作った荷車に落ちるほど積み込んだ家財道具を持って、住み慣れた家、長い間遊び慣れた山、川を後にした。「安東カブト在満国民学校」とも別れの一步を記した。時に私は十一歳の冬であった。小さな弟も自分と同じ姿である。社宅を出ると直ちに満人が各々の家の中に入っていた。主のいなくなった家財道具を奪いに来たのだ。荷車はみるみる山になっただらう。幸か不幸か自分たちの荷物は奪いに来なかった。「今からどこに行くの」聞いても返事のない黙々とした歩みだった。初めの間は両親、弟と離れぬ様に歩いた。

社宅を出てどちらに向いているか全く分からぬ「社宅」も「S池」も「カブト山」ももう目に入らぬ今までの楽しさや思い出を浮かべることもない。ただ歩いた。元気に励まし合って歩くのみだ。大人たちの声も



だんだん小さく、又少なくなる。「お兄ちゃん、どこへ行くの」「荷物が重いよ」弟の声もだんだんと小さくなって行く。笑顔は皆なくなっている。今考えると死の行進の第一歩であった。間もなく山中に入った。道らしき道を歩くのでない。出来る限り満人の里を離れての歩みであった。影を見つけられればこの集団が襲われる。ひどい目に合う、又大切な荷物を奪われる。こんなおそれもあったのだろうが、子供心に「もっと良い道はないのか」と思いながら歩いた。どれほど歩いたか、体に着け手に持った大切な物の重みが気になり出した。両手両腕に両肩、両足に疲れを感じえらさくをひしひしと感じ出した。痛くなって来た。

しかし、自分の一番大切な物だ「絶対に手放してはならない」と言い聞かせ又弟に話して歩き続けた。列を離れてはいけない。「遅れるな、遅れるな」と弟に声を掛けつつ死にも狂いで歩く、歩くというより足をひきずって、「遅れるな、遅れるな、荷物は捨てるな」と思いながら弟と懸命に集団の中にいた。「もう体も限界だ」と思った矢先列が止まった。「休憩」の声「あ

れ両親が、兄がいない」やっとの思いで見つけた。最後尾にいた。「お兄ちゃん」「お母ちゃん、お父ちゃん」と無言で走り寄った。疲労で声も出ない。少ない食べ物飲み物を分け合って口にした。多少の疲れもいやされた、でも集団の笑顔も話し声もない。ただ団長が人数を確認しているのみだ。

父母が言った、「荷物を少々捨てなさい」三人共首を横に振った。「捨てなさい」の声に大切な学用品をその場にそっと置いた。「あつ、もう少し入れよう、もったいない」と思いながら捨てた。大切な物ばかりであった。兄も弟も、集団のあちこちで同じ光景があった。又死の行進が始まった。ただ集団より離れぬように黙々と歩いた。弟と一緒に、次第に一層道も陰しくなり、道なんていうものじゃない、だんだん集団の後方になる。「駄目だ、駄目だ」と言い聞かせながら足をひきずった。「もう学用品なんか」と思い弟と二人草むらに置いた。又集団の後方について歩いた。夜になって「休憩」の声、両親兄を探して近付いた。皆両手の荷物は無い。父の車もない。「仕方ない皆必

死の行進なのだ」と思った。飲む物食べる物も少ない。固くなっている。少しずつ分け合って口にする。又

「出発」の声。「もうここでゆっくり休もうか」との声もあった。私も弟も思っていた。両親兄の声で又立ち上がった。「早く歩け」のどなり声、その声に多少勇気付けられて足をひきずった。夜になり前の人にくっついて行くのが精一杯だった。集団より離れないようにとそれで一杯の行進だった。

弟の姿がない、でももう探そうという気にもならない。必死だ、自分のことだけで頭も一杯だった。背中の学用品だけは絶対に捨てぬぞ」と考えながら集団の中にいた。両親、兄、弟のことなど探す気にならない。疲れ果てた時「川があるぞ」の声、皆急いだ。皆頭を垂れて水を飲んだ。腹一杯に飲んだ。冷たい、服のぬれなどおかまいなした。集団皆同じかっこうだった。川の中を膝までつかって歩く老若男女声を出す気力もない。ただひたすらに歩いた。足を滑らせて川に倒れた。さいわいにも近くの人が助け起こしてくれた。「ありがとう」又何分何十分か足をひきずって前へ進

んだ。

「休憩」の声と同時に水より出て又家族を探した。声は出ない。体が冷える。火はたけない。火を見つけて満人が襲って来るかも知れぬと言われた。「寒い疲れた」「もうここで歩くのをやめよう」と話していたが又集団と同じ道を進んだ。歩けど歩けど暗やみの中だ。泥道もあった。背丈ほどの草むらも歩いた。どろどろの中も進んだ。

何日目かもう口にする物は無いある日うなり音が聞こえて来た。「国府軍のトラックが三台来た」との声であり、団長が何か話をしている。内容はわからないが、数分後「車に乗れ」の声。我先にと荷物をほおり上げ子供を同じくほおり上げる、順番などない。先に乗った子供の上に又荷物をほおり上げる。瞬時にしてトラックは一杯だった。大人の下に又荷物の下になった子供たちの叫び声が聞こえるが、のんびりとしておれない。いつ満人などが襲って来るか分からぬため車は走り出した。走りながら子供を助け上げた。道なき道を、川の中を走った。

夜が明けて線路が見えて、そこでトラックをおりた。駅がある。汽車も停車している。団長が人数を確認したが数人足りない。子供と老人だ、死の行進で離れてしまったのだろう。又は親が置いて来たのだろう（今思うと戦災孤児はこのようにして出来たのだろうと思う。置くも置かれるも断腸の思いであっただろう、一歩おくれれば自分も孤児か故人になっていただろうと思うと何とも言えぬ気持ちである。寒さも限界、食べる物も何も口に出来ない。異国の地で運よく拾ってもらった子供は今の孤児となったのだろう。）駅には有蓋車が停車している。何分かの交渉後皆乗車した。扉を開けたまま敵寒の荒野を走った。果てしなき荒野を列車は時々停車した。お姉さんたちは用足しに飛び降りた。幸いに列車に戻された人はよいが、列車が走り出して乗れぬ人もいた。必死に列車を追ってきたが直ぐ姿は小さくなった。一人二人数が減った。男や老人たちは列車の中にあつた桶の中へ用を足した。私もその桶に用を足した。

少し走ると列車は停車した。線路がなく前に進めず

皆おりにすることになった。国府軍が逃亡時爆破して行ったそうだ。又死の行進が始まった。今度はその行進も長くなかった。家々が見えて来た。目ざしていたと言われる収容所の建物が見えて来たと言われた。奉天市街にある「難民収容所」であつた。皆これであんどの溜め息、「やっと着いた」ここで又家族を探した。いた父、母、兄弟、でもリュックの中はほとんど空っぽだ。でも皆五人そろつたのだ。

#### 収容所に

長くつらい死の行進も終わった。時十一月二十八日であつた。必死に歩いた、いや足をひきずつて集団について来たと言うのだろう。それも今終わったのだ。屋内に入った。今までの疲れがどつと出た。口も開かない。指示された場所に少しの荷物を置いた。皆倒れ込んだ。「やっと屋根の下で休める」布団は無いがわずかな荷物を背にして寝た。皆死人のようだった。何時間かして食事が配給された。何日振りに口にする温かい食物、無言で食べた。何日かして少しずつ疲れも取れ始めた。棒のようになった体、足も少しづつほぐ

れて来た。社宅を共に出たグループも少しづつ口を開く状態を取り戻して来た。多少の笑顔も見え始めた。

皆が少しづつ建物の外に出るようになった。私たち兄弟三人も外で遊ぶようになった。母は随分お金を持っていった。トラックに乗せてもらう時、時計や金を札に出したらしいが、母はまだ胴巻きの中に入れてこまで持って来たようだった。帰国には一人当たりの持ち金が制限されると言われていて、その範囲を残して街のうまい物をよく食べた。よく買って来た。着物衣服も新しくなった。友人にも同じように分け与えたようだった。満人とは違った食べ物だった。私たちも奉天の食べ物も口になじんで来た。収容所に入ってから二十一日目だった。

日本に帰れる

日本に帰れると聞いてからの収容所での生活は長い一日であった。十二月十九日ここを出てから一日目の二十日とうとう待ちに待った「日本へ帰れるのだ」と胸も躍った。そしてアメリカの上陸用舟艇に乗り込んだ。「この満州の地とも別れるのか」と思うと何だか

寂しさがこみ上げた。必死に歩いた山河、戦時中はいくつかの思い出を作ってくれた安東市小学校での学習と訓練が次々と思い出された。コロ島港を出発したのだ。艇は出た。死の行進から脱出した今、家族そろって出発出来たのだと思うとこれまでの苦勞もいざこかへ消えた。夜になって玄界灘に突入した。今までの恐怖とは違っていた。猛烈な艇の揺れだった。左右上下に立つのはおろか横になってもおれない。胃の中は空っぽになり、臓器まで飛び出すのではないかと思うほどであった。今までにない体験である。二十日の夜二十一日の夜と苦しい日々も過ぎて十二月二十二日の昼ごろ艇の上で空腹をいやすために桶の中に手をつこんで食べ物を口にしていたアメリカ人の目を盗んで一口にほうばった。出来る限りの口を開いて一気にのみ込んだ、と言う方がよいのかも知れない。同じような姿がそこに見えた。皆船酔いが治ったのであろう。何でも口にしたかったのだった。

十二月二十二日一人が叫んだ。「島が見えたぞ」「島が見えたぞ」「オーイ島が見えたぞ」「おーい島だ」

「どっちだ」「あっちだ」艇上の人たちも一斉に集まってきた。船酔いも空腹も忘れた人々が、やがて艇の上は人の群れとなった。「あれは日本だ」「日本だ」一斉に叫んだ。「日本の島だ」「日本だ」皆は手を取り合つて叫んでいた。「帰れたのだ、帰つて来たのだ」島はだんだんと大きくなって来た。屋根らしきものも見え間近になって来た。「もうすぐ上陸できるぞ」、口々に叫んでいる。「万歳、万歳、万歳」とあちこちで叫んでいる。今までの苦勞も一気に吹き飛んだかのように喜びに変わった。叫びに変わった。

もうその声も止まらない万歳の嵐だ。中には万感極まって泣き出す人もいる。もう所構わず泣いた。皆もそうだった、涙の顔だらけ。そして抱き合う。艇の上は満員だった。この姿、声が棧橋で待つ人々にも届いたのであろう。「万歳」の声と「お帰りなさい」の声が入り混じって飛び交っていた。誰さんもお帰りののほりも読みよれるほどに近づいた。間もなくエンジン音も停止した。「着いた」又大きわぎだった。喜んだ人々の姿「お帰り」の聲が又一段と大きくなった。「おーい

佐世保に着いたぞ」の声。

艇内に戻ってわずかな手荷物を持って上陸準備が始まった。一人一人点呼、私たちの家族の順番が近づいた。弟、私、兄、母、父と並んだ足も軽やかに思えた。タラップを降りて何メートルあったのか木造の棧橋を渡った。皆喜びの顔で一杯だった。またたく間に渡り終えた。足元がまだふらついている。前に白い服装に白い帽子姿の人数人が、注射器の大きい物を持って立っている…。

とうとう日本の土を踏んだのだ「日本に着いたのだ、日本に帰つて来たのだ」又涙が飛び出したのだ。いや吹き出したと言うべきか、白い服装の人の前に来た。白い粉を頭から振り掛けられた。大きな注射器で胸元へ入れたその先端からと背中からと体中に白い粉を注がれた。「DDT」という殺虫剤だった。目をつむっていた顔にも白い粉はまかれて、涙と粉で真っ白い顔、顔であった。皆今までの苦勞は全く見当たらない。見も心も真っ白になって本土へ帰った。上陸出来たのだ。その夜は感激で一睡も出来なかった。でも私たちはす

ぐねてしまった。(ここまで書くとき当時の苦しさと同  
陸時の喜びが入り交じって手が震え出した。)日本の  
地を踏み一夜を佐世保の地で、又用意して下さった布  
団の上でぐっすりと子供たちは寝た。少しの違いで  
そっと草むらに置き去られたり、行進の群より残され  
た子供、老人たち、今の私たちは全く幸せだった。今  
があるのはその時の頑張りや仲間の人々、両親の思い  
やりのたまものと思う。(何日佐世保の地にいたか今  
は聞く人もいない)。

ある日苦勞した数々の人との別れの日が来た。坂部  
家五人も母の弟の待った三河の上横須賀(今の吉良  
町)に向かった。蒸気機関車に引張られ、一人ずつ  
腰掛けて、天井には電灯もついて明るい列車に乗った。  
中国の草原を走った音とは全く違って聞こえた。おび  
えて乗った時と郷土へ向かう今の音は全く違って耳に  
入って来た。関門トンネルに入って何か不気味な音が  
している。やがてトンネルを出て日本の家々が見え始  
めた。停車駅での弁当も買ってもらった。「内地の御  
飯だ」。両親は自分たちの物を子供三人に分け与えて

くれた。夢中で食べた。

郷土の三河へ着いた

列車を乗り継いで上横須賀の駅に着いた。「坂部家  
お帰り」の幟も見えた。その幟に走り寄った。両親は  
何を語り合っていたか顔中涙、涙であった。やがて家  
に着いた。風呂に入った。疲れが一度に出たがゆっく  
りと寝た。ふんわりとした布団で。何日か過ぎてこの  
地を出て三河一色の街の銭湯の二階にお世話になった。

間もなく皆さんの世話で入学した「一色中部小学校  
四年山下先生」の級だった。皆温かく迎えてくれた。

父の仕事先も決まって名古屋の地へ移転した。「熱田  
区高蔵小学校四年の入山先生」の級。ここでも皆温か  
く迎えてくれた。やっと家族五人で暮らせる家が。

「坂部孫市」の表札のある入口、東洋紡の社宅であつ  
た。五年生になって先生の勧めで生徒会の書記に立候  
補し当選した。「私は引揚者ですが皆様が温かく迎え  
てくれたこの恩に応えようと立候補しました」と演説  
した。小学校生活も終えて、中学生になって間もなく  
父は四日市へ転勤、家族共々引越した。塩浜中へ転

入学して野球部へ入ったが、すぐスライディング中に右足骨折で約四か月学校を休んだ。父は自転車から自宅までの送り迎えをしてくれた。母は家の玄関でタライで入浴させてくれた。気の弱かった兄、又病弱だった弟も苦勞を分け合った家族四人はもうこの世にいない。

父が東洋紡を定年で退職し名古屋の現在地へ家を経て皆そこで幸せに暮らしたが、今は二男の自分だけになった。幸いに家族に恵まれ四人でこの家を見守っている。でも長男は転勤ばかり、長女と三人で暮らしている。兄の長女が二つになる女の子を連れて時々訪れてくる。

終わりに近づいたこの文を、亡き四人の顔と安東での日々を脳裏に焼き付いた全てを胸にして、又長男、長女の結婚を期待しつつ幸せな日々を送って行こう。

もう一度行って見たいあの安東の地へ

もう一度会って見たい幼き時の友に

再びあの悲惨な戦争が地球上で起こらぬ平和な世界を、全ての人類が平等な生活が送れる日々を祈念しつ

つ、この筆を置きます。

#### 【執筆者の横顔】

昭和十四年、坂部秘一さんは四歳の時、父親が東洋紡績(株)に勤務しているときに、この会社の営業所のある満州国安東に転勤になったので家族とともに安東居住となった。

安東は幼児の坂部氏にとって楽しい日々の連続だった。段々成長するに従って友達もできて、カブト山で水晶を採ったこと、小川で鮒をとったりしたこと、冬はスケートで遊ぶなど、坂部氏は、ここで小学校に入り三年生までみんなと仲よく勉強もした。

昭和二十年八月、坂部氏は十歳のとき日本敗戦にあった。ソ連兵はドカドカ家の中に土足であがり物品を略奪し、略奪を妨害すると暴行される。女の人を引っ張ってゆく。女の人はほとんど髪を丸坊主にしていた。一時坂部氏の父はソ連兵につかまって行方不明のままどこにも訴えるところが無かった。母は気違いのようになって悩んでいたが一週間も過ぎた日に帰宅

してみんなを安心させた。

坂部一家の受難が続く。鴨緑江の橋を渡れば朝鮮へ、日本へと引き揚げられるのに、安東は満州国である。

また東洋紡績安東営業所の上司は奉天に支社長がいる系統なので坂部一家は安東から奉天へ向かって引揚げるのが道筋であった。そしてコロ島へと続くのである。

先ず安東から無蓋車で奉天に着くまで列車めがけて暴民の略奪に、押し寄せてくる泥棒の群に幾度となく襲われるのである。女の人を抱きかかえて逃げるソ連兵。女の人の悲鳴があがる。その後を追う男は倒される。全くこの世とは思えない地獄の無蓋車は停車中の出来ごとである。

奉天に着いて治安のよいのに驚喜し、みんな労働してわずかの賃金で越冬し口糊をしのぎ、二十一年、奉天、錦州、コロ島に着き、乗船し出帆した。何日目か日本の陸地がみえたので、みんな涙を流して万歳を叫んだ。佐世保に上陸し、えんえんと東海道を走り郷土、愛知県三河についた。

父は東洋紡績(株)にむかえられ名古屋からやがて四日

市の営業事務所に転勤し頑健に恵まれ東奔西走した。

坂部秘一氏は小学校四年に編入し中学を卒業、昭和三十一年、工業高校機械工学科を卒業し社会人として一家をかまへ、苦勞して家族を支えた老両親に孝養をつくした。その姿に感服した。

(出)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

## 引揚げ犠牲者に捧げる

### — 満州開拓事業の回顧 —

京都府 水上七雄

終戦の結果、永年にわたり営々として築いた生活基盤を捨て、あるいは追われて、苦難の引揚げを強いられた同胞は数多い。

中でもソ連軍の侵入により、山中逃走、親子離散、集団自決、長びく收容所生活などで、内地引揚げの日を夢見ながら、広野の果てに屍をさらした同胞はおよ